# カロリング期エリート論の可能性
## ―カロリング期史料論のまえおきとして―

丹下　栄

### １．問題の所在

西欧中世における文書実践、あるいはリテラシー研究という枠のなかで、カロリング期に特有の問題系を考えることは可能だろうか。その答えは第一義的には、このあと報告される実証研究から導きだされるべきものであろう。しかしそれにさきだって、答えをどこに求めるべきか、1 つの見通しを提示することは決して無駄ではあるまい。以下はそうしたささやかな試みである。

1980 年代以降、カロリング期は再び多くの歴史家の関心を集めるようになってきた。19 世紀以来この時期は、ともすれば、カール大帝が作りあげた「帝国」が凡庸な後継者によって解体されていく「失われた」時代と見なされがちであった。しかし『カール大帝の嗣子』[*1]以降、この時代のダイナミズム、独自の論理と構造を読みとこうとする試みは、着実な成果を上げつつある[*2]。そのなかで見逃せないのは、カロリング期における文書形式、あるいは「史料類型」の消長が歴史家の関心を集めている状況であろう。例えば加納修は、プラキタというローマの伝統に強く規定された「メロヴィング的」文書がシャルル禿頭王期にぎこちなく復活したことに着目し、そこにカロリング王権による自己認識の変化を読みとろうとした[*3]。また J.-P. ドゥヴロワは所領明細帳という史料類型の成立過程を、文書（ここでは証書だけでなく、所領明細帳など実務に関わるドキュメントを総称してこの語を用いる）作成者の所領に対する視線（関心）の多様化や、それをうながした社会構造の変化と関連させて描きだした[*4]。ここで注目すべきは、どちらの研究も、ある文書形式や記録様式の消長は「状況的」現象であること、いいかえるとその書き手や使い手の状況認識と深く関わっていることを強調している点である。つまり 2 人の歴史家は期せずして、カロリング期において（も）、ドキュメントの作成とは単に状況を描写・記録する行為ではなく、記録にあたってどのような様式をとるか、また何を記録し何を記録しないのかを不断に選択する行為でもあることを示唆していると言えるであろう。

文書は、文字（つまり書きことば）によってしかるべき情報を固定し、読み手に伝達するために作成される。したがって、あまりに当然のことながら、文書の書き手と読み手は本来の意味で言うリテラシー（識字能力）を共有していなくてはならない。そして文書はなんらかの実務上の必要に応じて作成される。つまりそれを作成するには単なる読み書き能力だけではなく、外界で起こった現象を認識・解読し、必要に応じてそれに対処する技術・能力が不可欠である。現在リテラシーという語はその意味を拡大し、原義から離れて「ある分野の事象を理解・整理し、活用する能力」一般をリテラシーと称する場合もある[*5]。文書を「書く」、「用いる」という行為は、まさにこうした意味で使われる「拡大されたリテラシー」なくしては成立しない。その意味で、「リテラシー」と「エリート」との間にはある種の親和性を見いだすことが可能であると思われる。なぜなら「エリート」のエリートたるゆえんは血統やカリスマ以上にしかるべき技能（スキル）であり、リテラシー、特に「拡大されたリテラシー」はしばしばそのスキルの重要な一環をなしていると

考えられるからである。つまり、中世初期におけるエリートのあり方は、同時代のリテラシーのあり方を規定する、少なくともその一面を照射することが期待できるのである。以下、近年公表された 2 つの論文を手がかりに、「（拡大された）リテラシー」と「エリート」のカロリング的位置づけについて少し考えてみよう。

## ２．エリートと空間認識

エリートと「拡大されたリテラシー」との関わりを考えるとき、1 つの糸口になるのが、『エリートとその空間。流動性、影響力、統治（6〜11 世紀）』にドゥヴロワが寄稿した論文である[*6]。「距離を管理し活用する」という一見奇妙な表題を持つこの論文で、彼は社会人類学者ジャック・グッディの言葉を引いている。「書く écrire とは、単にパロールを記録することではなく、そこから諸要素 élements を切りとり、抽象するための、また語 mot をリストに整理し、複数のリストを表にまとめる手段を獲得することでもある。推論し認識するのに適した図式的 graphique 方法は存在しないだろう。思考様式が思考手段から独立することはできないだろう」[*7]。ドゥヴロワによれば、一定の広がりを持った空間を「非図式的」に掌握する能力こそが、エリートの持つべき、そしてエリートをエリートたらしめる「スキル」であった。「空間」の具体例としてドゥヴロワが念頭に置くのは、カロリング期の大所領である。森本芳樹[*8]や彼自身[*9]が明らかにしてきたように、サン・ジェルマン・デ・プレ、プリュムなどの修道院は広範な領域（前者で言えば、パリを中心としてセーヌ河口、あるいはシャルトル近辺まで、後者ならばライン中下流域からアルデンヌに至る）に個別所領を展開させ、個別所領と本拠地、あるいは都市的定住地との間で財貨や情報をやりとりするシステムを整備していた。ドゥヴロワによれば、こうした空間を場としたやりとりは領主層やそれをとりまくエリートの物的生活を支えるとともに、彼らの間に「コネクション」の網の目を張りめぐらせることによって、民衆に対する威信の源泉ともなったのである[*10]。それゆえ、大所領＝空間のありかたを「非図式的方法」、つまりは言葉（と文字）によって認識・記録する能力（リテラシー）はエリートにとって不可欠であった。所領明細帳や一部の所領確認文書など、大所領＝空間を、複数の個別所領を構成要素とする 1 つのまとまりとして記録するドキュメントはカロリング期にはっきりとした形をとって現れた。そこにはカロリング期エリートの持つ「リテラシー」が深く関与しているはずである。

それではこの「リテラシー」はどのような特徴を持っているのか。ドゥヴロワが提示するキーワードは巡回 déambulation である[*11]。C.-E. ペランの指摘[*12]以来、所領明細帳の作成にあたっては現地調査団が質問票を携行して空間内のいくつもの地点を巡回し、その順に所領を記載したことは、多くの歴史家の認めるところとなっている。こうした巡回によって作成されたのは所領明細帳だけではない。例えば 751 年に宮宰時代のピピン 3 世がサン・ドニ修道院の土地財産を確認した文書[*13]は、彼が修道院長の求めに応じて配下の者（彼らもまたエリートと思われる）に現地調査を命じ、その結果をもとに文書を作成させたことを明記している。同様にキルデリク 2 世がスタヴロ・マルメディ修道院に与えた文書[*14]でも、司教、宮廷役人と森番の巡回によって、修道院の領域が確定された。この文書の発給者はメロヴィンガーの王であるが、修道院の創建にはピピン 1 世の子で当時宮宰であったグリモアルドが深く関与していた。テクストの書き手がカロリング期エリートとリテラ

シーのある部分を共有していたと想定することは、決して不可能ではあるまい。

ここで問題となるのは 2 つの論点であろう。1 つは、エリートが現地に赴いて聞きとりを含む実地調査を行うという作業の意味である。ドゥヴロワはルイ敬虔帝のもとで活動したアイルランド修道士ディクルス[*15]の著作を引きながら、カロリング期のエリートが既存の情報をより新しい、より直接的な情報によって改訂しようと努め、また断定よりは調査と確認を、私利私欲よりは数値の正確さを優先しようとしていたことを指摘し、こうした指向は古典古代の著作家、およびポストローマ期のキリスト教知識人から受けついだものだと指摘している[*16]。実際、森林利用をめぐる争いの審理にあたって取りまきに現地調査をさせ、その結果をもとに裁決を行ったルイ敬虔帝の事例[*17]は、現地調査がさまざまな機会にかなりの頻度で行われていたことを示唆している。

もう 1 つは、「空間」を確認するための実地調査が、いくつかの地点を通って出発地に戻る円環状のコースを通って行われていたことに関わる。ドゥヴロワによれば、こうした巡回（環状運動）は古典古代において天体運行のアナロジーと見なされていた。カロリング期の聖職者たちは宇宙を円環として表す方法にプリニウスの『博物誌』やベーダの著作を通じて親しみ、古典古代の修辞をもとに人々は何かを「めぐって circum」議論するようになった。巡回しての実地調査は、したがって、一方では古典古代の知的伝統、他方では現象の直接観察によって情報をより確実なものにしようとする、ベーダに代表される知的指向を源流としていた。さらに、巡回という環状運動は、環状運動の場（所領空間）が（小）宇宙であり、巡回する者は宇宙を統べる者であるという言説を生む。つまり巡回とは空間認識のための作業であるとともに同時に、支配の道具としても機能したのである[*18]。

ドゥヴロワはこうして、「書く」という行為が情報の取捨選択を必然的に含み、それゆえおのずと権力行使の一面を持つことをも見逃してはいない。書くという行為そのものが持つ権力性、巡回を通じての権力の発現という、リテラシーが内包する二重の権力構造を摘出することで、彼は「リテラシー」のカロリング的外延を「エリート」と密接に結びつけたと言えるだろう。

## ３．テクストと「現実」、エリートとリテラシー

「エリートのリテラシー」がドゥヴロワの想定したような射程を持つとすると、そこから浮かびあがるのは、書くべき情報の選択はどのようにしてなされるのか、選択の結果はテクストと「現実」との関係にいかなる作用を及すのか、という問題系であろう。この課題に果敢に挑んだのが N. シュルーダーの近作[*19]である。ここで検討される主たる史料はスタヴロ・マルメディ修道院に伝わる 7 世紀の文書であり、したがってその知見をカロリング期のリテラシーやエリートに直接適用することには危険が伴う。しかしあとでも触れるように、この文書の作成には宮宰グリモアルドの取りまきが関わっていたとされる。文書の書き手が持つリテラシーが、カロリング期エリートのそれとなんらかのつながりを持つ可能性は否定できない。少なくとも、7 世紀におけるリテラシーのさまを検討することは、9 世紀におけるそれの特質を知るうえで一定以上の意義を持っていよう。

シュルーダーが取りあげるのは、中世初期ヨーロッパを覆う深い森のなかに創建され、俗界との関係を絶って祈りと労働にいそしむ修道院という、19 世紀以来しばしば人口に膾炙した言説である。実際、修道院の創建事情を語る文書や聖人伝はしばしば、修道院が人

里離れた森のなかに建設されたことを語っている。しかし第二次世界大戦後、伝統的言説は大きく揺らぐことになる。G. デスピィは、多くのシトー派修道院は実際は開発の進んだ集落の近くを選んで立地し、経済成長の流れに棹さそうとしていたと主張し、護教的歴史家を鋭く批判した[*20]。彼らの論争はしばしば、森林（荒野）に創建された修道院というテクストが現実を反映しているか否かを問う、一種の水掛け論的局面を含むことになるが、しかしシュルーダーは「拡大されたリテラシー」に着目することで、二者択一的議論を超える視点の可能性を提示することに成功したと言える。

彼はまず、643〜647/48 年にシギベルト 3 世が発給した文書[*21]に着目する。この文書によって王は、「アルデンヌと呼ばれる広がる余の森に in foreste nostra nuncupante Arduinna」、スタヴロ、マルメディ両拠点の周囲の半径 12 マイル以内の荒地 saltus を院長レマクルスに寄進した。ところで「余の森」は「さまざまな獣が増殖する広大な荒れ地に in locis vaste solitudinis, in quibus caetera bestiarum germinat」存在していた[*22]。伝統的な見解は germinare を「はびこる」といった負の含意を持つ語で理解し、か弱い人間を取りかこむ圧倒的で敵対的な自然というにイメージを紡ぎだしてきた。しかしシュルーダーは、この文書の書き手はグリモアルドの取りまきで、彼らはコルンバヌスによる修道院運動に強く影響されていたとする T. ケルツァーの想定を受け、こうした解釈に異を唱える。彼らは農耕を含む労働を軽蔑し、同時にまたフランクの貴族として狩りを好んだ。したがってさきにあげた文は「多様な動物が繁殖する」、つまり狩りの獲物が豊富に生息するという、彼らにとって好ましい状態を記したものである、ということになる[*23]。つまりこのテクストは、修道院の周囲に森林が広がっていたという「現実」をたしかに記しているが、森林に対する視線はかならずしも怖れを含んだものではなかったということになる。

次いでシュルーダーは、670 年にキルデリク 2 世が発給した文書[*24]に目を向ける。シギベルト 3 世の文書で一括して寄進された領域の南側は半径 6 マイルに削減され、同時に実地踏査に基づいて河川、道路などをランドマークとして領域の輪郭が確定された。ところで、ランドマークとして用いられたものの大半は水流や森などの自然景観で、耕地や定住地は皆無である。シュルーダーはここでも、書き手の「拡大されたリテラシー」（と想定されるもの）を踏まえ、また中世考古学の成果をも援用して次のように論じる。この時期アルデンヌの森では、各地で焼き畑による開墾が行われていた。しかしコルンバヌス修道院改革の影響を受けた踏査隊のメンバー、あるいは文書の書き手はそれを無視した。この時期のエリート（狩りを好み農耕を軽蔑する）にとって、森林、つまり狩り場に甚大な被害を及ぼし、しかも労働の場である焼き畑は非難、軽蔑の対象でこそあれ、文書に書きとめるべきものではなかった。さらに彼らは、ラテン語の単語を、「現実」よりはむしろ古典古代の著作家の用法を優先して意味づけした。したがって彼らは、短期間で耕作を放棄して別の場所に移動していく焼き畑を「耕地」ager として認識してはいなかった[*25]。全体としてこのテクストは、基本的には実際に見聞した「現実」をもとにしている。しかしそれは「現実」がすべてあるがままに記録されたことを意味しない。認識した事象のうち何を記録し何を記録しないか、さらにある事象を構成する多種多彩な要素のうち何を認識し何を認識しないかは、テクストの書き手が持つ価値基準、彼の置かれた政治的・社会的地位等々と密接に関係していた。そしてここであぶり出されるのは、修道院の周囲に広がる森林とともに、静謐（と狩猟）を好み労働を軽蔑する、7〜8 世紀フランク王国で活動する

エリートの内面化された価値観でもあった。

シュルーダーの論がどれほど説得的かを判断するには、多くの留保が必要であろう。さらにここに描きだされたエリートの営為を「拡大されたリテラシー」の具体的現れとするのは（彼自身はそのような発言はしていない）、牽強付会、我田引水のそしりを免れないであろう。それでもなお、「拡大されたリテラシー」について考えるとき、この論文がつねに参照されるべき作品の 1 つであることはたしかである。そして蛇足ながら、語の意味はなによりもまず、その語がどのように使われてきたかによって決定されるという、20 世紀の文学者が自覚的に認識し、それを梃子に文学の革新を行った考えが中世史の論文にさりげなく記されるようになった[*26]ことの意味も、決して小さくはないと思われる。

## ４．結語

小報告にもならぬ前座に、ことごとしい総括は必要あるまい。最後に個人的問題関心を書きつけておこう。かつて私は、シュルーダーがとりあげたスタヴロ・マルメディ修道院の文書を検討し、670 年文書に含まれる領域劃定のテクストが、ルイ敬虔帝、オットー1 世がそれぞれ発給した文書で、ほとんどそのまま（築場の持ち主の個人名まで）「使いまわし」された[*27]ことの理由を検討し、理由の 1 つとして、この修道院の特殊な立地条件（それぞれ異なる司教区に所在する 2 つの修道士団を 1 人の修道院長が統率する）が「現実」をあえて無視したテクストの再生産を必要とした、という想定を行ったことがある[*28]。検討は不十分なままそのまま日が過ぎ、ドゥヴロワとシュルーダーの仕事は、「テクストの使いまわし」を検討するにあたって「拡大されたリテラシー」に着目するという、あらたな視点を提示してくれた。ところで、書き手（エリート）の持つ「拡大されたリテラシー」の由来について、ドゥヴロワは 9 世紀のそれをプリニウスからベーダに至る「デカルト的」精神に、シュルーダーは 7 世紀に関してコルンバヌスの厳格な修道精神に求めている。それならば、670 年に作成されたテクストが、ルイ敬虔帝が発給した文書でほとんどそのまま再現されているのはなぜだろうか。コロンバヌス的リテラシーはルイ敬虔帝の時代にも生きながらえていたのだろうか。そのこととルイ敬虔帝とアニアヌのベネディクトゥスが行った修道院改革とは何か関連を持っているのだろうか。すべては今後の検討に期すしかない。ただ現状でも、「拡大されたリテラシー」の解明をもっとも必要としている時代の 1 つがカロリング期であると言うことは、十分に可能であると思われる。

---

*1 P. Godman, R. Collins (ed.), *Charlemagne's Heir. New Perspectives on the Reign of Louis the Pious (814-840)*, Oxford, 1990.

*2 一例として J.-P. Devroey, *Économie rurale et société dans l'Europe franc (VIe-IXe siècle)*, t. 1, Paris, 2003; id., *Puissants et misérables. Système social et monde paysan dans l'Europe des Francs (VIe-IXe siècle)*, Bruxelles, 2006.

*3 加納修「『プラキタ』の復活とシャルル禿頭王の王権」田北廣道 / 藤井美男（編）『ヨーロッパ中世世界の動態像−史料と理論の対話−（森本芳樹先生古稀記念論集）』九州大学出版会, 2004, pp.293-312.

*4 Devroey, "Les premiers polyptyques rémois, VIIe-IXe siècles", A. Verhulst (ed.), *Le grand domaine aux époques mérovingienne et cárolingienne (Actes du colloque international de Gand,*

*8-10 septembre 1983)*, Gand, 1985, pp.78-95.

*5 http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%AA%E3%83%86%E3%83%A9%E3%82%B7%E3%83%BC　2011 年 1 月 31 日取得

*6 Devroey, "Gérer et exploiter la distance. Pratiques de gestion et perception du monde dans les livres fonciers carolingiens", Ph. Depreux, Fr. Bougard, R. Le Jean (dir.), *Les élites et leurs espaces. Mobilité, rayonnement, domination (du VIe au XIe siècle)*, Turnhout, 2007, pp.49-65.

*7 Ibid., p.63

*8 森本芳樹『西欧中世形成期の農村と都市』岩波書店, 2005.

*9 Devroey, *Économie rurale et société dans l'Europe franc.*

*10 Devroey, "Gérer et exploiter la distance", p.59.

*11 Ibid., p.54.

*12 Ch. -E. Perrin, *Recherches sur la seigneurie rurale en Lorraine d'après les anciens censiers (IXe-XIIe siècle)*, Paris, 1935.

*13 H. Atsma, J. Vezin (ed.), *Chartae Latinae Antiquiores*, Dietikon, Zürich, t. XV, No. 595, pp.3-5.

*14 J. Halkin, C. -G. Roland (ed.), *Recueil des chartes de l'abbaye de Stavelot-Malmédy* (HR), t. 1, Bruxelles, 1909, No. 2, pp.5-8; MGH, DDMer., No. 81, pp.205-207.

*15 Ph. Depreux, *Prosopographie de l'entourage de Louis le Pieux (781-840)*, Sigmaringen, 1997, pp.159-160.

*16 Devroey, "Gérer et exploiter la distance", pp.62-63.

*17 HR, No. 29, pp.73-75.

*18 Devroey, "Gérer et exploiter la distance", p.64.

*19 N. Schroeder, "*In locis vaste solitudinis*. Représenter l'environnement au haut Moyen Âge: l'exemple de la Haute Ardenne (Belgique) au VIIe siècle", *Le Moyen Âge*, 116-1, 2010, pp.9-35.

*20 G. Despy, "Les richesses de la terre: Cîteaux et Prémontrés devant l'économie de profit aux XIIe et XIIIe siècles", *Revue de l'Université de Bruxelles*, 1974-1974, pp.400-422. 舟橋倫子「中世におけるシトー会修道院の経済活動について」『歴史学研究』695, 1997, pp.32-39.

*21 HR, No. 2; MGH, DDMer, No.8 1, pp.205-207.

*22 MGH, DDMer, No. 81, pp.206-207.

*23 Schroeder, "*In locis vaste solitudinis*", pp.31-34.

*24 HR, No. 6; MGH, DM, No. 108, pp.277-280.

*25 Schroeder, "*In locis vaste solitudinis*", p.34.

*26 Ibid., p.30.

*27 HR, No. 25, HR, No. 70; MGH, DIG, t.1, No. 178.

*28 S. Tange, "À propos du mode descriptif de biens monastiques dans les chartes du haut Moyen Âge: l'exemple de l'abbaye de Stavelot-Malmédy", S. Sato (ed.), *Genesis of HISTORICAL TEXT. Text/Context* (Proceedings of the Fourth International Conference Studies for the Integral Text Science), Nagoya, 2005, pp.81-89.